

1921年のアメリカにおける清水善造の活躍

— 新聞報道からの読み解き —

福地 豊樹

Zenzo Shimizu in the United States of America in 1921: A Consideration through Newspaper Reports

FUKUCHI Toyoki

はじめに

1921年、清水善造はデビスカップ大会（この時期の大会の正式名称は「インターナショナル・ローンテニス・チャレンジ」(International Lawn Tennis Challenge)であるが、以後、「デビスカップ」と表記する）に臨んだ。日本のテニス界において記念すべき出来事であり、これまでテニス史において、様々に言及されてきた¹⁾。清水と一緒に参戦したメンバーは熊谷一弥と柏尾誠一郎であった。柏尾はデビスカップでは、控えに回っていたが、前年のアントワープオリンピックのテニス戦では、熊谷と組んで、みごとに準優勝を獲得した²⁾ 実力者のひとりであった。当時の日本のテニス界では、いまだ軟式テニスが盛んな状況であり、テニス（硬式）は、普及の途上であった。しかし、熊谷や柏尾はアメリカにおいてテニスに触れた経緯を持っていた³⁾。

一方、清水善造は、インドの三井物産勤務の傍ら、テニス（硬式）に触れ、インド選手権に出場、そこで優勝、さらに1920年にはイギリスの複数のテニス大会に参戦、ウィンブルドン選手権のオールカマーズの決勝戦まで勝ち進んでいた。

日本は、こうした選手を抱えてはいたが、正式な自国内のテニス協会はなく、デビスカップ参戦も出来兼ねる状況であった。しかし、日本の参戦

は、アメリカテニス協会会長のジュリアン・マイクリック氏のはたらきかけもあり、急ごしらえの国内テニス協会からの参加申請が認められ、初参加となった⁴⁾。

デビスカップ大会はこの時点では、12か国の参加があり、国別の複数のゾーンに分かれ、試合を争うものであった。日本の清水と熊谷は1、2戦の不戦勝を経て、インドさらにオーストラリアを撃破し、決勝戦に進出する。相手は前年度優勝国の地元アメリカと争うことになった。

本稿は、1921年のアメリカにおける清水善造の活動を新聞記事を通して明らかにすることを目的とした。その際、一部イギリスにおける清水の活動の様子もアメリカへの前史として取り扱った。新聞記事は清水が残した「切り抜き新聞」を資料とし、考察を行う。清水は後年の帰国後、この「切り抜き新聞」等を自らの郷里である群馬県箕郷町の実家にアメリカからの引き上げ荷物として預けた。それらは、その後1987年に甥の清水道夫氏により、箕郷町に寄贈された。福地は、箕郷町の調査の折、この資料群を整理し、資料目録を作成、1993年に「清水善造の残した切り抜き新聞について」という演題で、この資料の紹介を行っている⁵⁾。

現在まで、「切り抜き新聞」については、以下のことが明らかにされている⁶⁾。



図1 切り抜き新聞

- ・切り抜き新聞は、1921年の6月から9月を中心に集められていた。
- ・切り抜き新聞は、イギリス2社、アメリカ5社の切り抜き新聞社から提供されていた（切り抜き新聞は出典となる新聞名と年月日が記載されている。図1を参照）。
- ・切り抜き新聞の総数（量）は、イギリス2社から438ピース、アメリカ5社から2035ピースという分量を数えた⁷⁾。

本稿では、この「切り抜き新聞」を資料として1921年のデ杯参戦に向けた清水善造の足取りをたどる。まず、渡米前の清水のイギリスでの活動に触れる。イギリスからの切り抜き新聞の点数はアメリカに比して多くはないが、注目すべき清水への言及や清水自身の発言を見ることができる。次にイギリスからアメリカに渡った清水に対するアメリカの人々の関心と清水自身のテニスの考え方やスポーツへの接し方を明らかにする。さらに、それら明らかにされた事実から、清水善造が日本のテニス界に果たした役割について検討を行う。

これまで、アメリカにおける清水の活動を追った研究はほとんど行われていない。わずかに「一橋のテニス」中に、いくつかのアメリカの新聞からの断片的な紹介がある程度である⁸⁾。本稿は新

聞という素材のみからの検討であり、限定的な省察になることの限界も有してはいるが、「切り抜き新聞」は全米規模からの情報を提供しており、歴史資料と言って差し支えないと思われる。

なお、本稿中の新聞からの直接の引用は「」（カッコ）を付し、末尾に新聞名と年月日を記した。今回使用した新聞は論稿の末尾に一覧として示した。

1. 清水のイギリスの活躍とアメリカ登場

1) イギリスにおける活躍

清水は1920年にウィンブルドン大会のチャレンジラウンドに進出し、アメリカのチルデンとの闘いで、テニス選手としての評価を高めていた。さらに翌年の1921年にもウィンブルドン大会参戦、惜しくも予選段階で敗れはするが、そのコートマナーの良さには、イギリスの多くの人々から素晴らしい評価が与えられていた⁹⁾。

ここでは、1921年、イギリスの人々からの清水へのまなざしを見たい。

6月26日のデイリー・ミラー紙では、イギリスで活躍するテニス選手達の複数の姿を示しており、特に清水のラケットの握りに着目し、「フォアハンドの握り方をバックハンドの握り方に換えることで、フォアハンドのストロークを実現した」と、ラケットの握り方の写真を添え紹介している（図2）。別の写真（図3）には、「賢明な日本人プレーヤー清水善造は、ラケットの裏でフォ

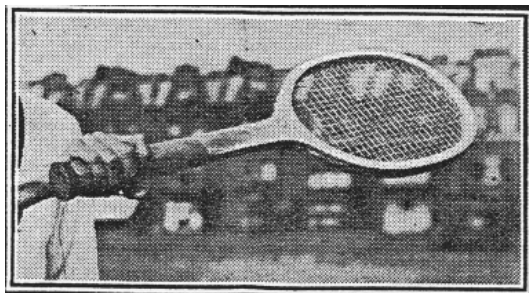


図2 清水善造のグリップ
（出典：Daly Mirror 26/6/1921）

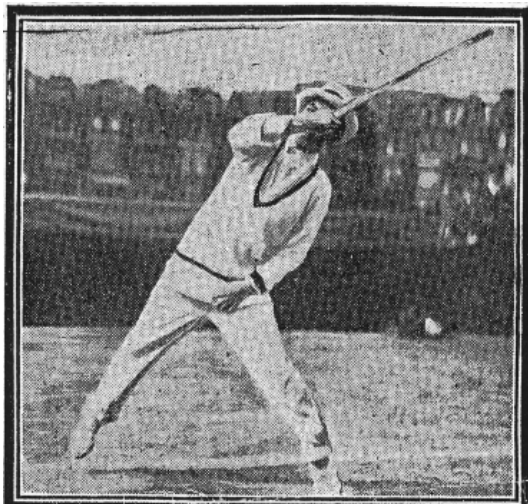


図3 清水善造のストロークフォーム
(出典：Daly Mirror 26/6/1921)

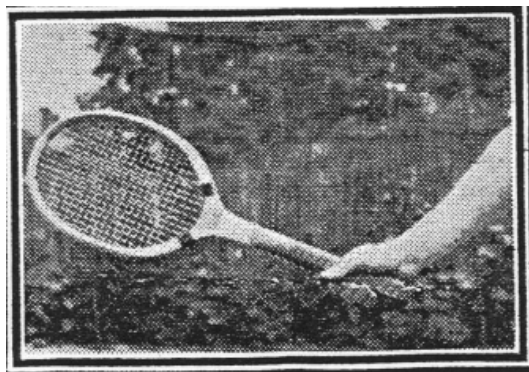


図5 W.T.Tildenのグリップ
(出典：Daly Mirror 26/6/1921)

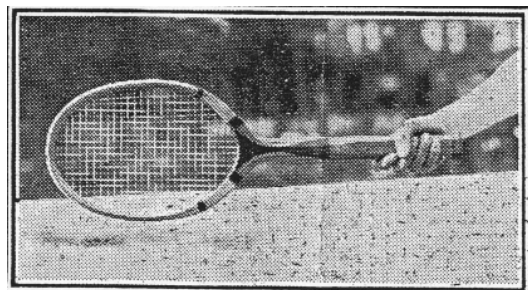


図4 F.G.Lowe (イギリス選手) のグリップ
(出典：Daly Mirror 26/6/1921)

アハンドを打つ」という紹介文も付されていた¹⁰⁾
(Daily Mirror 26/6/1921)。清水のグリップ写真の隣にはF.G.Lowe選手の典型的なイギリス式フォアハンドグリップの握り(図4)、さらにチルデンも握りも掲載されていた(図5)。

一方、清水のコート上の振る舞い、テニスに向き合う姿勢にも多くの目が注がれていた。特に清水のコート上の笑顔がイギリスの人々に大きな印象を与えていたが、図6の説明には「ウィンブルドンでは、このリターンを受けて、賢明な日本選手は一瞬、笑顔を失う」と付されていた(Glasgow Bulletin 22/6/1921)。

清水はイギリスに初めて登場した東洋(日本)のテニス選手であり、小さな体格であるが、強

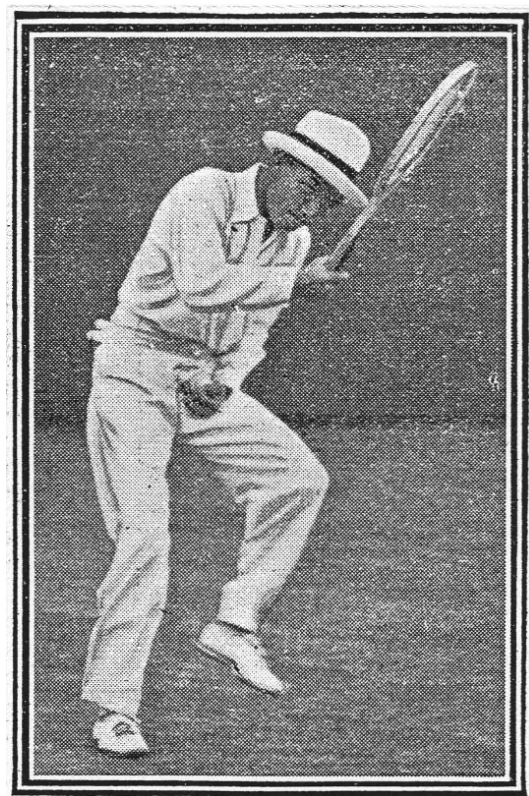


図6 清水善造のストロークの瞬間
(出典：Glasgow Bulletin 22/6/1921)

い。さらに、コートマナーが素晴らしい。いずれも、新参者に対する興味と紳士の行為の理解者としての驚きと敬意が入り混じったものであった。先のデイリー・ミラー紙には、次の文面が写真とともに続く。

「フォアハンドドライブのアクロバティックなフィニッシュ。微笑ましいが、手強い相手だ。」「オーソドックスとは逆の珍しいグリップで、常につま先立ちで動く。」(Daily Mirror 26/6/1921)

清水のこうした特徴はIwai Takahitoというイギリス在住の詩人によって、Shimidzu's SmileとShimidzu's Gripというタイトルの作品になり、新聞に掲載されていた(Evening News 1/7/1921)。清水の笑顔と清水のラケットの握りは両者ともに、清水善造のテニスシーンの特徴を表すものであった。

清水はこの年の7月、アメリカでのデビスカップ参戦のためにイギリスを離れるが、その時に記者のインタビューに応える清水の発言は注目される内容であった。7月6日の二つの新聞は若干伝え方を異にしているが、イギリスのテニス選手が本国での試合に勝てない理由を清水から聞き出している。

ひとつは、どのような改善策があるのか(How to improve English tennis)を直接清水が語り、もう一方は、記者がまとめる形をとり、Sunday Tennis for All, Dress, Not the playといういささかセンセーショナルな見出しが付されていた。

まず、前者から見ることにしたい。

清水は先週行われたウィンブルドン男子シングルス準決勝にイギリスの選手が出場できなかったことを大変残念に思っていると述べ、次のように語る。

「男性も女性も、良いテニスプレーヤーになるために必要な要素をすべて持っているのです。背が高く、運動神経がよく、優雅で、あなた方の女子たちは世界一美しいし、すべての面を鑑みて、あなた方は何十人ものチャンピオンを生み出すことができるはずです。しかし、競技の場では、ほんの数年前まで競技界で無名だった国々に負けてしまうのです。門外漢の私が、あえて改善策を提案させていただいてもよろしいでしょうか。まず、第一に、テニスはすべての人の手の届くところ

ろに置かれるべきものです。素晴らしい公園や空き地は、いろいろな遊びに利用されているように、テニスに利用されるべきです。・・・イングランドのような気候の国では、ハードコートがもっと作られないのが不思議なくらいです。ハードコートでうまくプレイできるようになると、芝生の方がまだプレイしやすいと感じるようになるのです。これは私自身の経験からも、またセニョール・アロンソの例からも分かることです。彼はイギリスに来るまで、ほとんど芝でプレイしたことがなかったのですが、それでもシングルスで決勝に進出することができたのです。」(Daily Graphic 6/7/1921)

さらに次のように続ける。

「テニスの初心者には、正しく始めることが極めて重要です。悪い習慣はすぐにできてしまいますが、それを取り除くのはとても難しいことです。優秀な選手、特に長く輝かしい経歴を持つベテラン選手が、夜の時間を割いて公園を訪れ、若い選手を指導することを求めるのは無理なことでしょうか。名選手からの激励の言葉や指摘は、初心者にとって大きな意味を持ち、そこから世界チャンピオンを育てる種を簡単に蒔くことができます。日本ではどの学校でもテニスを教えており、最初から良いスタイルが学べます。こちらでは、クリケットが専門ですよ。しかし、この2つの競技は打ち合うことはなく、片方が得意な子はもう片方も得意になります。また、クリケットになじめず、許されるならテニスを習いたいと思う少年も少なくありません。」(Daily Graphic 6/7/1921)

最後に、この提案はイギリスの人たちの気分を害するかも知れないとしながら、日曜日問題に言及する。

「日曜日にどこでもテニスができるようにしたらどうでしょう。教会に通いたい人は、午前中に通えばいい。多くの人は一週間働いて、夕方、頭と体が疲れてテニスに来ている。日曜日には、新鮮で元気な自分がいて、自分が思っていたよりもずっといいゲームができることに気づくかも知れません。」(Daily Graphic 6/7/1921)

この発言は、先に記したもう一方の新聞では、Sunday Tennis for Allという小見出し付きで報じられ、ほぼ同じ清水の発言を紹介していた。恵まれたクラブの一部の幸運なメンバーだけは、日曜日にプレイすることを許されているが、一般大衆はそれができないとも清水は言う。

この新聞では、先の新聞では触れていないことにも言及していた。それは、プレイよりドレス（服装）を気にするイギリスの人々に対し、やや批判的な見解を示すものであった。イギリスの人たちにとって、テニスの醍醐味は華美な礼服を身に着けることにあるようで、テニスの動きには実用的ではないというものであった（Evening Standard 6/7/1921）。

清水のこうしたイギリステニス界に対する意見陳述をイギリスの人々がどのように受け止めたのかについては、この論考の射程外であり、事実定かではない。しかし、外国選手にテニスの優勝杯を奪い取られてゆく状況は、清水の言及を待たずとも、イギリステニス界にとっては、切実な課題であったことが推測される。特に、日曜日の安息日への言及は、信仰上の問題をはらんでいるだけに、イギリスの人々にとって、清水の発言は苦々しく思ったことを推測することは困難ではない。しかし、イギリスの新聞の論調は、清水善造というテニスプレーヤーに対し、寛大であり、多大な興味と好感をもって向かい合っていたと言うことができよう。

2) アメリカ登場

清水は、7月7日にアメリカに向け、サウサンプトン港を出発した。この時、チルデン等のアメリカのテニス選手団も同じく乗船していた¹¹⁾（Daily Express 7/7/1921）。

清水はアメリカに到着すると、すぐに練習を開始した。ニューヨーク・サンは「清水善造、デビスカップの準備開始」と早速、次のように伝えている。

「デビスカップの準備のため水曜日に来米した日本のテニス界のスター清水善造は、昨日フォレ

ストヒルのウエストサイドテニスクラブの芝コートで、国際大会でチームメイトになる熊谷一弥と最初の練習を行った。プレイのスピードと持久力、そして無類の腕前を印象付けた。体格は熊谷とほぼ同じで、背は少し高く、体重は少し軽いかも知れない。清水は、驚くほど上手な英語で、アメリカ・ローンテニス協会が温かく迎えてくれたことへの感謝の気持ちを語った。同胞の熊谷や柏尾から、アメリカ国民がいかに親切にしているかを聞いてはいたが、まさかこんなに早く、ここまでしてくれるとは思ってもいなかったので、もちろん喜んでい。」（N.Y.Sun 7/15/1921）

そしてユーモアを交えながら、「秘密を教えてあげよう」と笑顔で次のように続けた。

「私は何年も前から、この国の偉大な選手たちに会ってみたいという願望を持っていた。昨年の春、アメリカに来ることが叶わないかと思ったが、このデビスカップの試合のために来米できることになり、言葉にできないほどの喜びを感じている。」（N.Y.Sun 7/15/1921）

同日のニューヨーク・ワールド紙も次のように伝えた。

「二人の日本人は、真面目にコツコツと練習を重ねた。練習は、長いラリーを交えながら、ベースラインに沿って行き来する特徴的な動きが中心だった。『フック・ドライブ』¹²⁾の同僚に比べると、背が少し高く、体格も華奢である。気温が高い中、大西洋を横断した時の疲労が残っているようであったが、清水は仕事を怠ることはなかった。清水は、インドの英国人と長く付き合ってきたため、英語はかなり流暢に話せる。東洋人特有の笑顔がちらほらと見え、しっかりした歯が光っている。」（N.Y.World 7/15/1921）

清水の登場は、アメリカにおいてすでに活躍していた熊谷一彌に比較されることが多かった。熊谷と組みデビスカップに挑戦する日本チームは、イギリスでの清水の活躍も伝わっており、注目度は高かった。

7月18日のフィラデルフィアの新聞は、その注目度を次のように伝えた。

「Itchy and Shimmy、この夏、全米選手権やデビスカップでアメリカを驚かせる日本のテニスチームのニックネーム。・・・イッチーも小さいが、シミーの方がまだ小さい。イッチー同様、普段はニコニコしていて、とても楽しい男だ。イッチーとは日本では大学時代のライバルだったが、その後6～8年は熊谷は日本、清水はインドとイギリスと、別々の土地に暮らしている。・・・イギリスの大会の最終ラウンドで、清水とチルデンが激突し、チルデンが勝利したことは記憶に新しい。」(Bulletin Philadelphia, Pa. 7/18/1921)

このように紹介された清水のアメリカでの活動が幕を開けてゆく。

2. テニスプレーヤーとしての評価

1) デビスカップ挑戦者

清水・熊谷のデビスカップ挑戦を伝えるニュースは「東洋一のテニスプレーヤーが、デビスカップの栄誉を賭けてやってきた」という見出しを報じ、次のように伝えた。

「イギリスで大騒ぎになったこの新参者のやり方は、よく知られている熊谷とよく似ている。清水は、熊谷よりも自由に、そして素早く打つことができる。ラケットを後方へ引きストロークをすることはしない。それにしても、早いテンポの動きだ。しかも、ボールが飛んで来る方向を察知し、空気が生じたスペースに電光石火で対応する。ある点では、このふたりは似ている。彼らは疲れ知らずの脚で、猛暑の中でも、疲れを見せずに5セットと少しをこなせるようだ。」(Intelligencer Seattle, Wash. 8/1/1921)

この記事では、清水のテニススタイルはイギリス式で、それは彼がインドやイギリスでテニスを学んだからと説明する。さらに英国圏で生活し英語も堪能であること、清水の会話中の笑顔や白い歯が印象的と伝えていた。また、清水という名前の発音が難しく、発音の仕方まで解説している。

「S・H・I・M・I・D・Z・U」とスペル通りに発音すること。“pin”のように両方の“i”を短くする。日本語の音声はアクセントが少ない



図7 清水善造のイラスト①

(出典：Post Houston, Tex. 7/27/1921)

ので、どの音節にも同じ力がかかることを覚えるのが本当のコツだ。イギリスでは“シミー”というニックネームで呼ばれていた。それがきっかけになる。それからゆっくりと、アクセントを付けずに、一文字一文字発音することだ。」

(Intelligencer Seattle, Wash. 8/1/1921)

ヒューストンのポスト紙は清水の顔とテニスフォームのイラスト(図7)を交え、次のように伝えた。

「ここでもう一つ、日本からの厄介者を紹介しよう。日本のテニス界のカリスマ、ゼンゾウ・シミズ(Zenzo Shimidzu)¹³⁾。デビスカップを目指す熊谷のもとにやってきた。シミズ(Shimidzu)、またはシミー(Shimmy)と呼ばれることが多い。この2年間、英国で活躍し、世界でもトップクラスの選手と認められている。昨年のイギリス選手権の決勝でチルデンと対戦し、長身のフィラデルフィア選手と大接戦を繰り広げた。シミーのスタイルは熊谷とよく似ているが、熊谷はサービスとフォアハンドに優れており、前者はオールラウンドプレーヤーとして優れていると言われている。清水と熊谷は、8月11日にシカゴで行われるデビスカップの2回戦で

インドチームと対戦する。」(Post Houston, Tex. 7/27/1921)

清水善造への着目度は、どの程度の実力であるのか、どのようなプレイをするのかという点であったと言えるが、清水の人柄に触れる記事も多い。例えば、次のような内容である。

「シミーは、普段からニコニコしていると言われている。それは、テニスコートの中でも外でも同じである。笑顔の日本人の平静さを物語る良い話が、イギリスから届いている。」(Bulletin Philadelphia, Pa. 7/18/1921)

続けて、イギリスでのライセット戦¹⁴⁾の紹介が引かれ、シャンパンを飲み疲れ果てた態度を見せる対戦者に対し、何一つ不満を表すことない態度を示した清水への称賛(「素晴らしい性格を兼ね備える」という小見出しが付されている)が記される。

「シミーはイッチーほど上手くはないと認めているが、それはまだ証明されていない。彼は確かに良いスポーツマンだ。オリンピック号で港にやってきた彼は、炎天下の中、少なくとも12人を下らないカメラマンのカメラに向かって10分間ポーズをとっていた。その姿は、まるで暑い日の厳しい試合を乗り切ったかのようなだった。『アメリカはいつもこうなのか』と、彼は顔の汗を拭い、『いや、重要人物だけなのか』と語りながら、シミーは再びニヤリと笑った。」(Bulletin Philadelphia, Pa. 7/18/1921)

2) 独特な打法とテニススタイル

清水の独特な打法やテニススタイルに関する記事にもイギリスと同様、注目が集まった。清水の打法は日本の軟式庭球の経験がもとになっていることは周知の事実であるが、アメリカでの着目度も当然高かった。ここではアメリカの人々が清水のどこに関心を示したかを見ることにしたい。アメリカでの活動が始まった7月末、ボストンの新聞はJAP'S GREAT ENDURANCEとの見出しで、次のように伝えた。

「『持久力はどこで身に付けるのかという質問

ですか、それは、テニスを習ったからでしょう』と上手な英語で答えてくれた。日本企業の社員としてインドに8年間滞在したことで、英語はすっかり身に付いていた。『日本には昔からテニスがあるんです。』と清水は続けた。『しかし、このテニスとは大違い。向こうでは小さなゴム球を使うんです。おもちゃのような柔らかいものです。それを何度も何度も打ち返すので、ラリーが長くなるんです。5ゲーム中3ゲームがベストマッチ。そうですね・・・短時間の試合のようですが、1ゲームの試合が15分ということもありますから、1時間以上かかることもあり得ます。でも、こういうテニスは、いわゆるダブルスですよ。日本ではそれしかやったことがないんです。ネットに立つ人とベースライナーがいる。ずっと同じポジションをキープするんです。ベースライナーのみがサーブする。こうして見ると、いかに持久力があるかということが分かります。・・・フォアハンドドライブのことを聞かれるんですね。まあ、今まで見たことのないようなものだと思います。手首をひねって、ボールにトップスピンをかけるんです。カルカッタには岡本忠というパートナーがいるのですが、彼も同じようなストロークを完成させています。』(Eve Transcript Boston, Mass. 7/29/1921)

清水の流暢な英語はすでに様々に紹介されていたが、そうした直接の語りが清水という人物への着目度を高めたことは間違いない。清水の独特な打法に関しては別の新聞では次のように伝えられている。

「アメリカのテニスファンの間では、清水氏の人柄が人気を博している。その笑顔はいつも楽しいで、カバーできないショットを相手が打ってきた時には、グッドショットを認めてさらに笑みを浮かべる。肘のひねり方が独特で、『イギリス式』¹⁵⁾のボールの回転量が非常に多いため、多くの選手がたじたじになっている。」(Eve. Sentinel Milwaukee, Wis. 8/1/1921)

この新聞では、日本のダブルスチームは強く、デビスカップでは、強敵になるという見出しで上

記のような清水のプレイスタイルを伝えていた。

清水への関心はプレイスタイルばかりではなかった。ニューヨークの新聞は次のように伝えた。

「日本人の清水善造が、アメリカのゲームの進歩に、二転三転して貢献したとしても、少しも不思議はないだろう。清水の疲れ知らずのエネルギー、小走りで連続的なコートカバー、さらに独特のグランドストロークに秘められた驚異的なパワーは、ここカジノの芝でプレーヤー達の動向を見守る人々に新たな興味を抱かせることになった。・・・清水は厳格なベジタリアンである。選手たちの中には、彼の理論を掘り下げて、それなりに驚いている者もいる。リトルジャップは、肉をまったく食べない。新鮮な野菜と果物を、ほとんど生で食べている。また、彼の肉体的なトレーニングの特徴として、液体をほとんど取らないということも驚きだ。水しか取らない。コーヒー、紅茶、刺激物は一切使用しない。実際、彼は食事に気を配っていることについて、『刺激物やアルコール飲料は人生で一度も使ったことがなく、味も知らない』と語っている。もうひとつ、このカジノのグランドマンが発見したのは、この小さな日本人の足取りが決して軽くはないということだ。ハワード・キンゼイを破ったコートのベースラインを行き来する姿は、芝生を根こそぎ引き裂いてしまうほどだった。」(Evening Post, New York City. 8/3/1921)

清水が野菜と水だけでプレイをしているというのはいささか誇張した表現と思われるが、かように清水への注目は続けられた。熊谷も清水もベースラインプレーヤーとする紹介は別にも見られ、特に小走りでベースラインを駆け回る清水の動きが芝を引き裂くように痛めていると、芝の管理者が困惑する様をも伝えていた。

デビスカップ前のテニストーナメントに参戦しながら次第にその姿を明らかにしてゆく日本のプレーヤー清水を別の新聞は次のように伝えた。

「清水善造は1891年生まれ、東京の大学出身。1913年、1916年、1918年、1920年にカルカッタで

ベンガル選手権を制覇¹⁶⁾。1920年にヨーロッパを巡回し、顕著な成功を収めた。・・・堅実で力強いドライブを特徴とする健全なバックコートゲームを展開する。そして、まずまずのボレーヤー。サービスには弱いだが、正確なプレースメントができる。身長5フィート6インチ、細身、右利き、コート上で非常にアクティブ。」(Everett, Wash. News 8/14/1921)

この新聞では、熊谷一彌、柏尾誠一郎も紹介が続き、熊谷はアメリカのテニス界で第3位にランクされるなど、目覚ましい活躍オールラウンドプレーヤー、柏尾はベースラインの選手で、持久力に優れていると伝えられた。

3. 日本のテニス事情を語る清水

テニスプレーヤー清水善造は、その語学力¹⁷⁾を生かし、新聞取材に対し興味ある発言を行っていた。日本のテニス事情への言及は渡米直後よりたびたび行われていた。

7月18日には、次のような語りが掲載された。

「日本のテニスの黎明期には、私たちはシングルスをやっていなかったんです。ダブルスだけで、しかもゴムで覆われたボールで。私たちのダブルスは、イギリスとアメリカがやるようなゲームとは違っていました。ネットマンとバックコートマンがいて、つまり、チームのメンバーの一人が常にネットに張り付き、もう一人が後ろにいます。私はバックを、熊谷はネットを、それぞれ担当しました。」(Bulletin Philadelphia, Pa. 7/18/1921)

このような清水の語りは、アメリカの人々の興味を引いたことは想像に難くない。前述したように実際に清水や熊谷の活躍を報じた新聞は、そのような記事を多く配信していた。デビスカップ戦の決勝戦には敗れはするが、試合後¹⁸⁾の9月13日の新聞記事には、同様な内容を含む清水の記事が掲載されていた。

「ここで行われているテニスの全国シングルス選手権大会に出場している百数十人の選手の中で、明日の午後、世界チャンピオンのウィリア

ム・T・チルデンと対戦する日本のスター、清水善造ほど絵になる選手はいない。今日、独学でテニスを学び、鋭い観察力と分析力を持つ清水が、テニスについて面白いことを言っている。『デビスカップのためにアメリカに来てから、本当に素晴らしい若手選手をたくさん見る事ができた。もちろん、チルデン、ウィリアムズ、ジョンストン、ウォッシュバーンなど、皆さんのスター選手の活躍は海外で聞いたり、見たりしたことがありますが、アメリカで戦う外国人選手の心を打つのは、本当に素晴らしいテニスをする数々の若者たちです。どこへ行っても、ヨーロッパのベテラン選手のように落ち着いて、巧みに、そして戦略的にラケットを扱うことができる10代前半の新たなプレーヤーがたくさんいるのです。・・・デビスカップを制し、アメリカから遠ざけるためには、今後、スーパーテニスプレーヤーが必要とされるでしょう。日本ではこのような状況はなく、これまでテニスのパイオニアは精一杯の努力を重ねてきました。日本では大学や学校でプレイされていたのが始まりです。熊谷も柏尾も、そして私も、多かれ少なかれ独学でやってきました。フェルトで覆われたボールでプレイするようになったのは、ここ数年のことです。私は平たいゴムボールでゲームを覚えました。熊谷は来月日本に帰り、若い選手を指導することになっています。我が国には有望な新人がたくさんいますし、熊谷が滞在中に学んだことをすべて教えれば、数シーズン後にはきっといい選手がたくさん出てくることでしょう。』(New York Herald 9/13/1921)

記事は次のようにも続けられる。

「テニスは独学と言いながら、ウィンブルドンでもフォレストヒルズでも、その実力はうかがい知ることができる。彼は世界チャンピオンに屈したが、チルデンに5セットまで迫った。不屈の精神で、信じられないような追いつきとリターンを繰り返す彼のストロークは、一般のテニスファンには理解しがたい特異性を持っている。」(New York Herald 9/13/1921)

この記事は、清水の日本への帰国を前に、デ

ビスカップやアメリカの若い選手達の印象を聞いたもので、長いインタビューとなっていた。さらに、ここでも清水の独特な打法への言及が見られ、清水の存在の特異性を示す記事となっていた。

4. 清水のスポーツマンシップ

清水善造のコート上での立ち居振る舞いは彼のプレイに対する真摯な行為とともに、アメリカの人々の関心を誘った。すでに見てきた通り、彼の発言はテニスのみならず、彼の行動にまで及び、日本という国を印象たらしめる結果をもたらしたと言える。当時、アメリカは西欧以外の文化に対し、排他的な傾向にあった。特に日本や中国を含めた東洋社会に対する偏見は、スポーツの世界においても例外ではなかったことが分かる。清水の登場は、その意味で、様々な憶測を呼び、その活躍ぶりに対し称賛を送ると同時に、いぶかしがる様子を見ることは可能である。例えば、デビスカップ後ではあるが、フィラデルフィアの新聞には、図8のような描写の清水のイラストが掲載されていた。そこにはZENZO SHIMIDZU THE LITTLE JAP WONDER MANという文字と、



図8 清水善造のイラスト②

(出典：The Philadelphia Inquirer Tuesday Morning 9/13/1921)

次のようなキャプションが付されていた。

「この機知に富んだ、笑顔の、スポーツマンライクな東洋人は、マンハイムでの全米シングルス選手権の参加者の中で最も美しいキャラクターだ。清水は今日、デ杯から一、二週間ほどで、2回目のチルデンと対戦する。東洋と西洋の代表者間の聖戦が再び始まることをテニス界全体が期待している。上記スケッチの作者は、テニスラケットを持った小さな『厄介者』(“Yellow Peril”)¹⁹⁾の顕著な特徴をいくつか描き出した。」

(The Philadelphia Inquirer Tuesday Morning 9/13/1921)

デ杯の決勝戦でチルデンを追い込んだ清水を称える一方、いくらかの屈折した心境を読み取ることができよう。しかし、私たちは清水の様々な評価を通して、テニスというスポーツがその後にとどることになるスポーツ理解という切り口をこれらの新聞報道から読み取ることができる。そのいくつかを見たい。

7月27日のインディアナポリスの新聞は「日本のスター選手」の見出しで次のように綴った。

「近年、山東問題(Shantung Question)を除けば、このイッチーとシミズのテニスデュエットほど、桜の国の知名度を高めたものはないだろう。熊谷はテニス選手としては4位で、相方の清水より少し上というのが一般的な認識である。小柄でウサギのように機敏、そして稲妻のように素早い。イッチーはいつでも強敵にふさわしい。派手なネットプレーよりも、正確さとドライブングパワーで勝負するベースライン・プレーヤーである。彼は必ずリターンを深く打ち、時にはロブで相手を欺くこともある。シミーは、昨年のデビスカップ^(デビスカップ)²⁰⁾で決勝まで進みながらチルデンに敗れ、一躍脚光を浴びた。これは、デビスカップ^(デビスカップ)初参戦の選手としては驚異的なことであった。シミーはイッチーと同じくバックプレーが得意で、それでチルデンと対戦する前にフランスのゴベールやマブログルダートを破っていた。世界チャンピオンとの対戦では、チルデンの膝の負傷に助けられ、ヤンキーのスターはバツ

クコートของเกมを選択した。チルデンがネットに向かい、スマッシュを決めたとき、(チルデンは)自信を取り戻した。」(News Indianapolis, Ind. 7/27/1921)

ロングウッドトーナメントに参加した清水を別の新聞は次のように紹介した。

「小柄な選手たちだが、ロングウッドの試合ではそれぞれが勝負強さを発揮し、ロングウッドで見たことのないような素晴らしいプレイを何度も見せてくれた。アメリカのテニスファンの間では、清水氏の人柄が人気を博している。その笑顔はいつも楽しそうで、相手がプレースメントを出すと、グッドショットを認めてさらに笑みを浮かべる。」(Eve. Sentinel Milwaukee, Wis. 8/1/1921)。

清水とチルデンとのシングルス戦後のニューヨークグローブ紙の記事は「テニスを通じた親睦」という表題を掲げ、次のように伝えた。

「昨日のフォレストヒルズで清水善造がチルデンをほぼ攻略したのを見た者は、その程度はともかく、日本に対する親近感をさらに深めたことだろう。キップリングの『東は東、西は西、両者は決して出会うことはない』は、彼自身のセリフにしばしば含まれるその感情への反証にもかかわらず、かなり広く受け入れられている。昨日、ほとんどの観客は、この勇敢な若い日本人を理解し、賞賛していた。彼は、とても好人物で、礼儀正しく、逆境に強く、敗北に微笑む、アメリカ人のあるべき姿だ。彼を生み出した国の行動規範と、私たちが自ら形成してきた行動規範は、非常に多くの共通点があることは、誰が考えても明らかであった。日本とアメリカは未知のサイクルで離れてしまったが、どうやら民族の間には親族関係があるようだ。」(New York Globe 9/3/1921)

チャレンジラウンドでの清水達の奮闘を別の伝え方(Japs Are Wonderful Sportsmenという見出しを付して)をしたものもあった。

「日本はチャレンジラウンドで好感触を得るとともに、選手たちは勝負を知り尽くしたスポーツマンとして、最後まで一点一点を激しく争った。

清水と熊谷は、どんなに不利な状況でも決して諦めず、最後のポイントは最初よりも難しくなっていた。試合は、スコアが示すよりも接戦だった。多くの試合でポイントはデュースにもつれ込み、もし日本人（ジャップ）に何らかの運があり、あるいは試合の切れ目で有利になっていたら、多くの敗北が勝利に変わっていたことだろう。例えば、清水はチルデンから第3セットを取るのに、あと2ポイントだけだった。フォレストヒルズの批評家たちは、この外国人のプレイに大いに感心していた。彼らは、ネットからできるだけ離れ、ベースラインに張り付くという、ほとんど守備的なゲームに依存していた。攻撃面では、保守的であるため、華麗な動きをすることはほとんどない。彼らはボールを奪い返し、相手にミスをさせる。しかし、中には素晴らしいリターンもある。彼らはとてもしなやかで活動的なので、コート中を走り回り、確実にポイントになりそうなボールにはラケットを当てることができるのだ。しかし、彼らのスポーツマンシップが最大の特徴である。敗れた清水と熊谷は素晴らしく、試合を見た人は皆、それに同意した。試合終了後、帽子を脱いでネットに向かい、勝者を祝福するちょっとした礼儀作法が、何よりも観客の心をつかんだ。」(Eve. Public Ledger, Philadelphia Pa, 9/5/1921)

このような新聞の評価はまさに清水や熊谷のはつらつとしたプレイに対し送られたものであった。熊谷は数年前よりアメリカでプレイを行っており、その手腕には定評があった。加えて清水の前年度のイギリス、ウィンブルドン大会での活躍は、アメリカにも伝えられており、日本のテニス評価を限りなく押し上げるものであった。何よりも清水の笑顔とプレイに向かう態度は、アメリカ人の模範とすべき行動規範だという言葉さえも生み出してしまった。デ杯を日本に渡さずに済んだという安堵感はもちろんあったと推測されるが、敗者としての日本選手達の態度には、スポーツ理解やスポーツマンシップを彷彿とさせるものをアメリカの人々も感じ取っていたと言えよう。

清水はこの年の11月に日本に帰国するが、各地

で行われた講演会では、欧米のスポーツ理解やスポーツマンシップについて、大いに語っていることも、自らの経験から彼自身がつかみ取ったことがらだったと言えよう²¹⁾。

おわりに

本稿は清水善造が残した「切り抜き新聞」を素材に、1921年のアメリカ、デビスカップ戦を中心とした清水の活動を明らかにしてきた。清水善造に関する研究はこれまで試みられたことは稀であった。清水のテニス史上の活躍は広く知られるところではあったが、その実像に迫るには、我が国のテニス黎明期で、その活躍が国外であったこともあり、基本的な史料を欠いていた。その意味で、本稿で取り上げた新聞資料はその空白を埋める役割を十分に果たしていると言える。清水の活動は彼がインドに赴任した時点から始まる。その活動に関しては、ここでは一切触れることができていない。しかし、1920年のウィンブルドン大会参戦に至るまでの前史は今後明らかにされるべきと考える。今回の「切り抜き新聞」は1921年を中心に集められたもので、清水のテニス史の一片でしかない。それでもなお、そこから提供される事実は、清水善造のテニスの歩みにおいて、最も重要なポイントとなることは間違いないと思われる。

最後に二つのことを付け加えたい。まずは以下、一つ目のことがらである。日本チームのデビスカップ参戦は日本にとってまさに偉業であったが、健闘むなしく、決勝戦では全敗した。その戦いの日本に対する称賛はこれまで見てきた通りであったが、ボストンのヘラルド紙は、この戦いを次のように報じていた。

「シミーに休息なし（小見出し；引用者補足）：チルデンはテニス疲れと言われている。しかし、今シーズン、彼はライバルたちの誰よりも多くプレイしていないので、現時点ではそうとは言い難い。トーナメントに出場していないため、コンディションが悪く、タイトル獲得に必要な大きな負荷に耐えられないようだ。この夏の初めには

セントクラウドでプレイし、その後ウィンブルドンのチャレンジラウンド、アガワムのシングルスとダブルス、全米ダブルス、デビスカップのシングルスに出場した。今シーズンの清水選手の記録を見ると、非常にハードなプログラムであることが分かる。世界選手権の前夜には、彼のキャリアで最高のテニスを披露している。ウィンブルドンでプレイし、アガワンでシングルスとダブルス、ロングウッドでシングルスとダブルス、ニューポートでシングルスと、病気になるまでプレイし、デビスカップの予選でシカゴへ、その後、カップ決勝でニューポートへ、チャレンジラウンドでフォレストヒルズへ行ったのだ。」(Herald Boston, Mass. 9/9/1921)

清水善造の1921年の戦いは、壮絶を極めていたと言えるかも知れない。多くのデビスカップチームはシングルスとダブルスとのメンバーは別々に余裕をもって参戦する。一方、初参加の日本の場合は柏尾を加え3名であったが、柏尾は控えにまわり、清水と熊谷のふたりですべてに対応した。広いアメリカでの開催地の移動もかなりの距離となる。この間のコンディションづくりは、恐らく二人に任されていたと推測される。新聞が伝えた野菜と水だけでこの数か月間を戦えるはずはないと思われる。デビスカップまでの間に臨んだ試合で清水は体調を崩し、棄権せざるを得ないこともあった。熊谷はデビスカップの期間、枯草熱という風土病に悩まされていたという。しかし、日本のテニスの始動は、こうして清水善造や熊谷一弥、そして柏尾誠一郎達によって始められていった。

二つには、清水の評価に散見できる社会情勢に関する事項である。1921年の清水善造のアメリカでの活躍は驚きをもって人々に伝えられてはいたが、第一次世界大戦後の世界情勢は未だ道半ばであったと言える。日本人清水は時としてJAPと呼ばれ、スポーツマンライクな行動は評価されたが、その評価には「山東問題」という政治問題まで持ち出されていた。ベルサイユ条約下の課題は、未解決な状態と言えた。さらに東西の文化

差への言及も散見できる。テニスという欧米生まれのスポーツをその行為を通して示す清水は、その意味で、上記の困難さを身をもって感じていたに違いない。しかし新聞から読み取れることは、あくまで清水のテニスに対する飽くなき追及であり、誠実さであった。イギリスやアメリカの人々は、その事実には戸惑いながらも、巧く反応を示していた。清水や熊谷はそうした経験や事実を日本に持ち帰った。そのことの意義は大きいものと言える。しかし、清水や熊谷が示したテニスのパフォーマンスの結果の賛美だけでは彼らの活動の意味を汲み取ることはできない。とりわけ、1920年代の世界やアメリカは大きな社会変動のうねりの中にあつた。第一次世界大戦後の処理は未だ半ばにあり、人種問題や経済活動はその後に続く大きな転換期と連動していた。残念ながら、本稿ではそうした点への検討には着手できていない。しかし、清水が言い放ったイギリスでの日曜安息日問題や、アメリカの人々が抱いていた東洋への偏見や蔑視を一部ではあるが、同時代の新聞報道の中に垣間見ることができた。清水を報じた新聞報道の数々は、そうしたことがらを私たちに気づかせてくれている。

これまで清水の活躍に関して伝えられてきた情報は断片的なものであり、その動向を正確に読み取することは困難であった。今回の論稿は新聞というメディアが清水善造に着目した評価の一面と言える。しかし、これまで見てきた通り、清水が残した切り抜き新聞は、それらの空白ともいえる事実を蘇らせるに十分な情報を提供していた。2,500ピースに及ぶ「切り抜き新聞」の全体像からの事実の解明は今後の課題としたい。

注および引用・参考文献

- 1) 一橋庭球倶楽部・一橋大学庭球部編「一橋のテニス」(1982年)には「清水善造伝」(pp.619-647)、「外国で活躍された先輩たち」:「柏尾さんと清水さん」「デ杯戦、初の参加」(pp.566-579)が掲載されている。デ杯戦に関する情報は清水自身の語り(「デヴィス・カップ戦の思い出其他」:「運動年鑑」7朝日新聞社発行1922年7月pp.11-36)と熊谷による報告(「デビス、カップ国際競技参加」:熊谷一彌「テニス」改造社1923年pp.262-286;国立国会図書館デジタルコレクション<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/976984>, 2022年7月21日閲覧)が知られるところである。この二つの報告は、棚田眞輔により他の資料と解説を加え転載、紹介されている(「清水善造と熊谷一弥のデビスカップ争奪戦の思い出 大正十年、フォーレストヒルズ」神戸商科大学経済研究所 研究資料NO.149, 1995年, pp.1-44)。
さらに、清水の出身地群馬県では、清水を紹介する書籍や資料を多く見ることができる。上毛新聞社からは1972(昭和47)年に「群馬のスキーとテニス」(みやま文庫)に「日本テニスの故郷=群馬県庭球小史、清水善造」(pp.1-79)の章が執筆されている。この執筆者は明記されておらず、参考資料の提示もないが、清水の発言と思われる箇所も残されている。清水の生い立ち等に触れた内容は、その後の清水の活躍の伝承に関わり、他の資料でも、たびたび引用等で用いられている。他に群馬県小学校中学校教育研究会小学校体育部会編「まんが群馬スポーツ人物伝」(1991年):「ウィンブルドンに日本人初出場 清水善造」(pp.83-92)、高崎高校創立百年記念誌「翠巒の群像」(1998年):「伝説を生む男 清水善造」(pp.87-100)等がある。
- 2) アントワープオリンピックでの日本チームの活躍は、熊谷自身の詳しい手記(「国際オリンピック大会参加の記」)が残されている(熊谷一彌「テニス」改造社 1923年 pp.286-300;国立国会図書館デジタルコレクション<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/976984>, 2022年7月21日閲覧)。また、「運動年鑑」6(朝日新聞社発行、1921年, pp.22-47;日本図書センター 1984年 復刻版)にも、第7回の大会に参加した日本選手15名の報告中にテニス試合の活躍の様子が記載されている。
- 3) 熊谷や柏尾、さらに清水達の海外での活躍を受け、国内のテニス事情も変化しつつあることを「運動年鑑」7(朝日新聞社発行、1922年)は次のように伝えていた。
「…其刺激を受けたる為めか、内地の各大学、専門学校等が殆ど一斉に軟球を捨てて硬式を使用するに至りしは、九年度に起りし最も特異の現象なり」(p.210)
- 4) デ杯出場には、国内のテニス協会からの登録・参加申請が原則であったが、この時点で日本には正式な組織はなかった。アメリカテニス協会会長の勧めもあり、日本は庭球協会を仮発足させ、参加が認められるという経緯があった。正式な日本庭球協会の発足は翌年の1922年3月であった(財団法人日本テニス協会サイト:「日本テニス協会の歴史」<https://www.jta-tennis.or.jp/history/tabid/253/Default.aspx>, 2022年7月21日閲覧)。後藤光将はこの間の事情について詳細に触れている(「日本における硬式テニスの全国統括組織の形成と確立」明治大学教養論集、465号、2011年、pp.51-79)。
- 5) 福地豊樹「清水善造の残した切り抜き新聞について」スポーツ史学会第7回大会発表抄録集、1993年、pp.26-27
- 6) 1993年時点の福地の調査による。その後のこの資料に関する経緯を記す。箕郷町に保存されていたこの資料は、群馬郡箕郷町が2006年に高崎市に合併された経緯の中で、所在不明になっていた。2020年に高崎市井出町に清水

善造メモリアルテニスコートが設立・運営開始となり、そのレストハウス内に清水善造の若干の資料が展示された。それら展示資料の確認から箕郷町に保存されていた資料の所在が明らかにされた。資料は、その後、高崎市により、市の別な施設に保存となった。福地は2022年3月に資料の所在の確認は行ったが、個々の資料の確認（切り抜き新聞の点数等）は行い得ていない。

- 7) 1 ピースは切り抜き 1 枚の意味である。1993 年の時点の点数の確認である。なお、今回、論稿で利用した新聞はイギリス 6 社、アメリカ 16 社の新聞名が確認できている（末尾に一覧を記した）。利用したアメリカの新聞はシアトルやテキサスのものも確認できるが、アメリカ東部地区の都市（州）の新聞を利用する結果になった。ただし、切り抜き新聞社の所在地はオレゴン州やカリフォルニア州にもあり、新聞は東部地区だけに限定され、蒐集されたわけではないと思われる。約 2,500 ピースにも及ぶ切り抜き新聞の詳細な分析は本稿とは別な課題と考えている。
- 8) 一橋庭球倶楽部・一橋大学庭球部編「一橋のテニス」（1982年 pp.639-640）中に清水のイラストが掲載されているが、出典の新聞名は明らかではない。
- 9) 清水の活躍については本論で後述するが、前年の1920年の清水の活躍に直接触れた記述はわずかばかりであった。特にウィンブルドン・オールカマーズの決勝戦に関する清水とチルデンとの闘いへの言及は News Indianapolis 紙（Ind. 7/27/1921）にチルデンの膝の状態の悪さに触れている程度であった。後に日本で展開される清水善造美談にまつわる事実、つまり、チルデンが転び、清水がやわらかなボールを返したという出来事の新たな記述（事実の証明）の発見はなかった（このことに関しては、福地豊樹「清水善造美談『美はしき球』に関する一考察—執筆者矢島鐘二の創出という視点から—」スポーツ史研究、第24号、2011年、pp.15-26を参照されたい）。1921年という切り抜き新聞の性格からして、前年の話題について、取り上げることはなかったかと推測される。
- 10) 清水の打法に関しては、際立った特徴があったことが知られている。軟式テニスからテニスに移行した清水はラケットの同じ面でフォアハンドストロークとバックハンドストロークを行っていた。つまり、ラケットの片面だけ使う打法で、バックハンドストロークのようなラケットの持ち方で、フォアハンドストロークを行っていた（「デヴィス・カップ戦の思い出其他」；「運動年鑑」7、朝日新聞社発行1922年7月 pp.34-35）。そのラケット使いの異様さがイギリスでは話題になっていた。この新聞の写真はそうしたイギリスにおける清水の注目度を知る貴重な資料と言える。
- 11) イギリスのウィンブルドン大会参加から清水はデビスカップ参戦のため、直接アメリカへ向かった。この船にはチルデンを含むアメリカのテニス選手団の外にもオクスフォード大やケンブリッジ大等のイギリスの大学の陸上競技の選手団がアメリカの大学との対抗戦の為に乗船していた。その中には、著名な短距離選手ハロルド・エイブラハムスもいた。
- 12) 「フック・ドライブ」はアメリカで活躍していた熊谷のドライブ打を言い表していたようである。
- 13) この新聞では、清水の表記を Schimidzu と綴っていた。カッコを付して記すことにした。
- 14) この年のウィンブルドンの対戦相手 R・ライセットとの準々決勝戦の出来事。
- 15) アメリカの新聞では清水のテニススタイルはイギリス式と報じられており、独特の打法による回転がかかったボールを、ここではイギリス式と報じていた。
- 16) 清水のベンガル選手権大会参加は1913年であり、初参加で優勝。1915年から5年間連続優

勝した。連続優勝 5 回、通算 6 回の優勝とされている（「一橋のテニス」(p.568, pp.624-625)。

- 17) 清水が英語を上手に話すことは、すでに何度も報じられていたが、ボストンの American 紙は、清水は 6 カ国語を操ると紹介していた。

「“SHIMMY” (シミー) ! 今、テニス界で最も注目されているキャラクター、清水善造 (世間では「シミー」と呼ばれる)。6 ヶ国語を操り、世界を何度も旅した国際人である。ニューポート大会では、素晴らしいプレイを披露してくれた。」(American Boston Mass. 8/2/1921)

- 18) 清水はデビスカップ後、9 月には、いくつかの大会に参加していた。

- 19) イラスト中に付された表現 (the little brown man, the little jap, trick hat, a large white ulster)、さらに加えられた解説文の “Yellow peril” は「黄禍論」が背景にあったことを見事に示している。風刺画を素材に黄禍論を考察した飯倉 章「黄禍論と日本人」(中公新書 2013年) の中にも the little jap (p.162) という表現を見ることができる。

- 20) 新聞ではデビスカップとあるが、明らかにウィンブルドンの誤りである。続く箇所も同様と思われる。

- 21) 帰国後の日本での講演記録としては、清水の母校高崎中学校における記録 (群馬県立高崎中学校校友会誌 第33号、pp.17-27、1922年12月31日発行)、さらに東京と大阪で行われた講演記録 (「運動年鑑」7、朝日新聞発行 1922年7月、pp.11-36) が残されている。前者は校友会生徒による詳細な講演の記録であり、清水の語りそのものがほぼ復元記載されている (福地豊樹「1921年の清水善造の高崎中学校講演記録について」北関東体育学研究、第8巻、2023年、pp.13-20)。後者は編集者による二つの講演のまとめであり、清水の校閲を得たものとされている。

引用新聞名 (発行年月日)

イギリス (日, 月, 年) :

Glasgow Bulletin 22/6/1921

Daily Mirror 26/6/1921

Evening News 1/7/1921

Daily Graphic 6/7/1921

Evening Standard 6/7/1921

Daily Express 7/7/1921

アメリカ (月, 日, 年) :

N.Y. Sun 7/15/1921

N.Y. World 7/15/1921

Bulletin Philadelphia, Pa. 7/18/1921

Post Houston, Tex. 7/27/1921

News Indianapolis, Ind. 7/27/1921

Eve Transcript Boston, Mass. 7/29/1921

Eve. Sentinel Milwaukee, Wis. 8/1/1921

Intelligencer Seattle, Wash. 8/1/1921

American Boston Mass. 8/2/1921

Evening Post, New York City. 8/3/1921

Everett, Wash. News 8/14/1921

New York Globe 9/3/1921

Eve. Public Ledger, Philadelphia Pa.

9/5/1921

Herald Boston, Mass. 9/9/1921

New York Herald 9/13/1921

The Philadelphia Inquirer Tuesday Morning

9/13/1921

(2022年7月26日受付)
(2023年3月9日受理)